

1. 研究目的

本研究の目的は接触場面における日本語学習者の聞き手行動を、母語話者が主な話し手となるトピックの中で観察し母語話者との違いを明らかにすることである。

2. 先行研究

- 堀口(1997) 学習者同士の会話から聞き手行動を分析
- 柳田(2008) 中国人学習者に聞き手ストラテジー指導
- 楊(2015) 聞き手行動と話題への参加の仕組みを中国、日本語母語話者で比較
- 勝田(2015) 学習者の聞き手行動は留意、調整されにくい性質があることをマレーシア人留学生の接触場面の調査結果から指摘

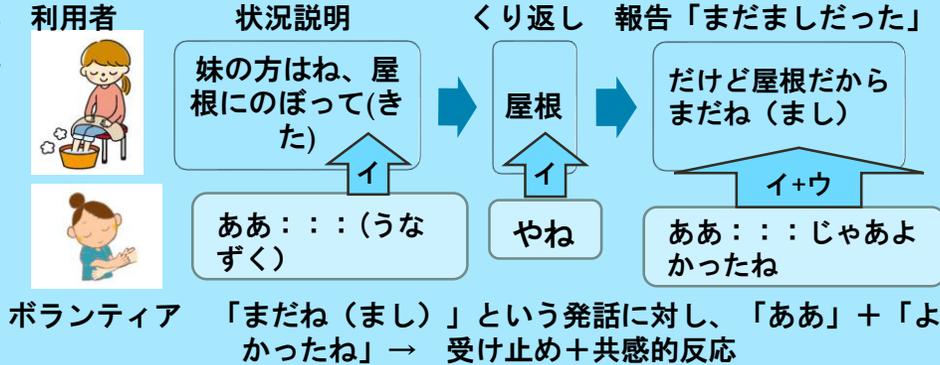
3. データと分析方法

調査協力者と組み合わせ
母語話者A, B, Cと学習者D, Eから2人1組 A-B(母語話者)とC-D, A-E(母語話者と学習者)の3組

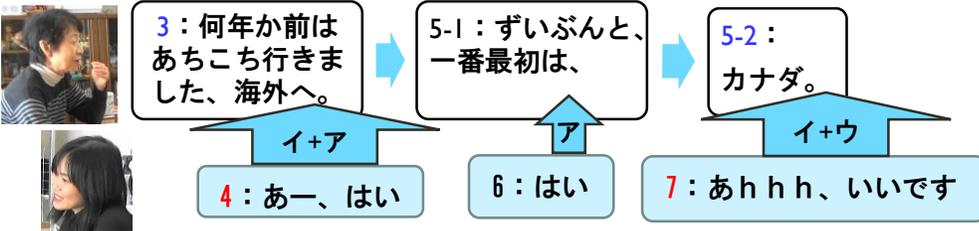
収録内容・時間
雑談・1組約45分、延べ135分
トピックごとに分割し、考察対象とする。

- 分析方法
- メイナード(1993)の分類を参考にし、本発表では、聞き手行動を以下のように分類した。
 - ア) 基本のあいづち、イ) 受け止め
 - ウ) 評価、エ) 語りへの関与
 - 黒嶋(2013)は、ボランティアが利用者の語りに段階を踏んで共感を示す様子を発話の連なりに注目し、分析している。この方法を援用した。

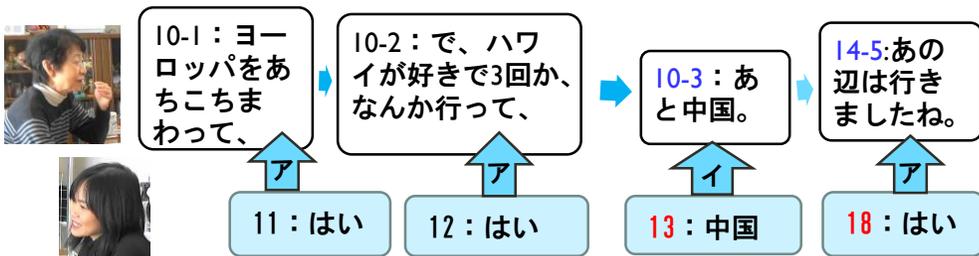
黒嶋(2013:158) 段階をへる共感



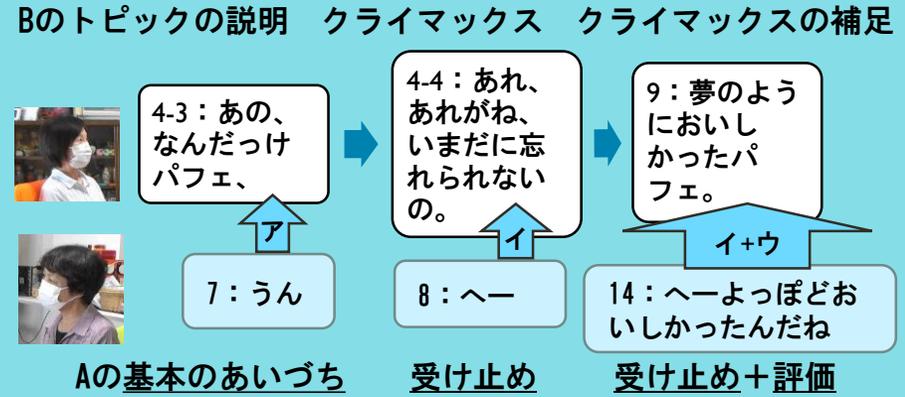
(2) 学習者の例 CD海外旅行 基本のあいづち、受け止め、評価はあるが、変化が小さい



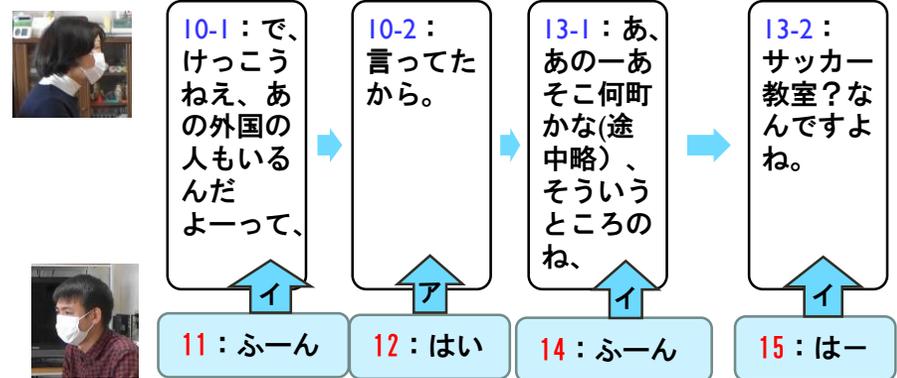
- 母C3 ←学Dは4で受け止めののち、基本のあいづち。評価はない。
- 母C5-2 ←学Dは7で受け止めと評価。評価の形式は母語話者であれば「いいですね」などとなる場所。
- 母C10-3 ←学Dは13でくり返しの形式で受け止め。評価はない。
- 母C14-5 ←学Dは18で基本のあいづちを打つ。評価はなくトピックはこのまま終わる。



(1) 母語話者の例 ABチョコレートパフェ 話し手の発話に沿った聞き手の反応



(3) 学習者の例 AE孫のサッカー 「ふーん」「はー」の受け止めが物足りなく、評価もない。



- 母A10-1 ←学Eは11で受け止め 母Aの発話はトピックのクライマックスと考えられるが、「ふーん」の形式は関心を示すものとしては物足りない。
- 母A10-2 ←学Eは12で基本のあいづち。10-1,10-2で母Aからの情報は一定程度出そろったがそれに対する評価がない。
- 母A13-1 ←学Eは14で受け止め。評価はない。
- 母A13-2 ←学Eは15で受け止め。評価はない。